

翻訳作品における発話表現

—性差・キャラクター・人間関係—

住 大 恭 康

(受付 2004年10月22日)

1. はじめに

対象の性差に依存した指示表現の差違に関しては、特に、フェミニズムの発展と並行して、社会構造との関係で議論され続けており、日常生活でも政治的な正しさ(PC)に対応する言語表現が求められてきている。現在では、新聞、雑誌、テレビのニュースなどでも、外で働く「主人」である夫と、家族や家の世話をする「主婦」である妻という役割分担を基調にした記述が避けられ、いわゆる女性冠詞¹も見あたらなくなってきたように思われる。しかし、日常生活においては、活字や報道番組で少なくなった「保母」「看護婦」といった表現や、女性が使うことばと男性が使うことばの差違が残っている。そこで、本論では、対象の性差が、言語表現とどのように関連しているかではなく、発話者の性差等がある内容を表現する際の形式とどのように関連しているかに関して、サスペンスの小説を例として検討する。それによって、翻訳における表現選択にあたって考慮すべき点、さらに、翻訳作品がもつ機能の一側面が明らかになろう。

2. 女性の発話と男性の発話

以下の会話は、『ベビーシッター』²において、妊娠中の女性(ジョージア)がベビーシッターの求人を見て来た女性(ハリエット)と会う場面で、リビングに置かれている修繕された長いす見ながら交わされる会話である。

- (1) A1:「まあ、すばらしい才能なこと」ハリエットが言った。「こんなふうにもものを生き返らせることができるなんて」
B1:「才能じゃないわ。時間と労力の問題よ。たっぷり時間をかけること」
A2:「いつか教えていただけないかしら？」

¹ 弁護士、医師、議員、作家といった表現に対し、女弁護士、女医、女性議員、女流作家のように女性であることを示す表現のことをいう。

² 参考とするアレクサンドラ・フライ 竹生淑子(訳) 1995 に関しては、以下、『ベビーシッター』とする。ちなみに、この文献を扱うのは、文脈を無視して表現形式を検討するために、先行文脈なしで会話が始まるテキストを古本屋で探したところ、たまたま見つかったからである。最近のことばを議論する資料として1995年は少々古いものの、ことばのレベルでは特に古さは感じられなかったため、問題ないと判断した。ただし、第4章で触れるように、その判断自体が問題かもしれないことをあらかじめ断っておく。

B2:「そのうちに喜んで教えるわ。でも妊娠中はだめ」

A3:「ええ、もちろん今は無理でしょうけれどー」(『ベビーシッター』20-21)³

(1)の会話が交わされる部屋の中にはジョージアとハリエットしかおらず、また、A1には「ハリエットが言った」という記述がある。そのため、文脈がなくてもAは女性であると理解されよう。しかし、そのような文脈や記述がなくても、A1からA3の発話によって、Aが女性であることは明らかだと考えられる。また、Bに関して、文脈上、女性(ジョージア)であることは明らかであろうが、そのような文脈から外してもB1, B2から女性であると理解するのが自然である。そして、A, Bいずれも女性であると理解されるのは、いずれの発話にも「女ことば」の特徴があるからだといえそうである。例えば、A1の「まあ」という感嘆詞の使用はほとんど女性に限定されており、A3の「ええ、もちろん」といった同意を表す相づちも女性の会話において頻繁に使われると指摘されている。A1のように述定が先行する倒置や、A3の「けれどー」といういいさし、さらに、「いただけないかしら?」といった丁寧な表現も、女性の発話に現れやすいといわれているものである。そして、ワ、ダコト、ヨ、ナンテ、カシラといった文末の表現が、A, Bが女性であることを決定付けていると考えられる⁴。それに対して、以下の(2)については、著者が下線を引いた文末表現によって⁵男性同士のものと理解されよう。

(2) A1:「まいったよ、まったく。上の部屋にずっと詰めっぱなしだ。今何時だ? もう九時か。

十一時間だぞ。それでまだ終わらないんだからな」

B1:「今どこにいる?」

A2:「ホテルのロビーに決まってるだろ。自分の部屋があるつてのに、ロビーの公衆電話からかけてるんだ。とにかく部屋から出たかったのさ。連中の吸うイギリス煙草と来たら、中に一歩足を踏み入れたただけで肺癌になっちゃう」

B2:「形勢は?」

A3:「あせだくだ。考えられるか? エアコンの効いたホテルのロビーにいるのに汗だくなんだ」

B3:「形勢は?」(『ベビーシッター』7-8)

Aの発話における、終助詞が続かないダヤカ、あるいは、ナ、ダゾ、ダロ、ダロウナ、ノサといった文末、さらに、ツテノニ、ツチマウは、女性の発話ではあまり耳にしないものである。Bの発話に関しても、仮に女性であれば「今どこにいるの?」など、B1においてそれなりの終助詞が使用されるであろう。

ところで、(2)のBが男性と理解されるのは、女性が使用しがちな文末表現がないという否定的な条件にもとづいており、仮にB1を「今どこ?」とすれば、Bは女性でも男性でもよさそうである。ところが、その場合にもBは男性と理解されそうであり、その判断に関与しているのは、語彙などの表現形式ではなく、会話を進行させる際のストラテジーであると考えられる。Tannen 1990やPease /

³ 発話の前に記した、A1, B2といった記号は、Aの発話の一つ目、Bの発話の二つ目といった位置付けを表しており、議論において問題となる部分を分かりやすくするために著者が与えたものである。以下の例も同様。

⁴ 仮にオカマであってもジェンダーやセクシャリティとしては女性とみなすことができようが、ここでは、生物学的なセックス、社会的なジェンダー、性的志向としてのセクシュアリティが一致しているものとして議論を進める。

⁵ 以下、他の例においても、下線は、著者が問題となる部分を明示するために与えたものである。

Pease 2001 で指摘されている、協調・競争、慰め・問題解決、親しみ・情報といった女性・男性の言語使用における対立を考慮に入れば、B の発話は、相手の話を半ば無視するように質問している点で競争的であり、自らが求める聞き手の場所、状況についての情報をとにかく手に入れるという問題解決型であるため、男性的であるといえよう。仮に、B1 において場所に関する質問をする前に、長時間の交渉を続ける相手を労ったり、B2 で煙草を吸うイギリス人を非難したり、B3 で A の体調を心配したりすることばを入れたりすれば、B は女性であるという感じが強くなるかもしれない。

(1)は女性同士、(2)は男性同士の会話であったが、男女の会話では以下のような例があげられる。

- (3) A1:「ねえ、あなた、何の話かわかる？見つけたのよ！とうとう見つけたの」
 B1:「何を？」
 A2:「ベビーシッター！たった今帰っていったところ。鎖に柱でつないでおきたかったくらいよ。月曜の朝八時半から来てくれることになったわ」
 B2:「そう」 ローレンス・エルジン・コーフィは伸びきった麺のように気のない返事をした。
 :
 B3:「ジャスティンはもう会ったのか？」
 A3:「ええ」
 B4:「それで？」
 A4:「あの子のことは知ってるでしょう。例によっておずおずして、ほとんどしゃべらなかつたわ。でも大丈夫。彼女が帰ったとたん、今度はいつ遊びにきてくれるのかって、しきりに聞くのよ」
 B5:「いくらで雇うつもりだ？」 (『ベビーシッター』17-18)

文末の表現についての検討は割愛するが、A1 の「ねえ」という間投詞や、「あなた」という呼びかけ、さらに、「何の話かわかる？」という相手の注意を惹きつけようとする表現は女性に多く使用されがちだといわれている。そのため、A は女性であると理解されよう。B に関しては、B2 においてその発話者がローレンスとされており、それ以外、必要な情報を集めるためだけに発話していることから、問題解決を重視する男性であることがわかるであろう。

女性が使用することばに関しては、感情的で、まとまりがなく、明確でなく、確信がもてず、遠回し（婉曲的）で、無駄口が多いといった否定的な印象が指摘されることが多いが⁶、A1 の「見つけたのよ！とうとう見つけたの」は、文法的な不完全さによって、まとまり、明確さが欠けていると感じられ、さらに、同じ内容を繰り返す強調を含めて、感情的だと思われる。また、A2 の「鎖に柱でつないでおきたかったくらいよ」ということばも、感情を大げさに伝えているといえよう。ベビーシッターが相手をするようになるジャスティンの気に入ったかどうかを問う B4 に対して、A4 では、態度を描写することによって、遠回しに「気に入った」ことが伝えられていると思われる。必要な情報が明確に述べられておらず、確信がもてないと判断されよう。(3) の A1, A2 は「ベビーシッターが見つかって、月曜の朝八時半から来てくれることになったわ」と簡潔に述べることができ、A4 も「気に入ったみたい」と言えば情報として充分である。つまり、A は必要以上にことばを話していると判断するこ

⁶ 柔らかい、美しい、明るい、優しい、丁寧といった肯定的な印象もあげられるが、声質やイントネーション、表情や態度、あるいは、体形や顔の造作であればともかく、柔らかい、美しい、明るい、優しいといった印象を表現形式やストラテジーから議論することはできない。なお、(2)の B、(3)の B の簡潔な発話は「無駄口が多い」の逆であることから、B が男性と理解されよう。

とができよう。さらに、B2, B3の間で省略した、ベビーシッター候補のハリエットが失恋で悩んで大学をドロップアウトしたというゴシップ的な内容の発話を含めて、Aには無駄口が多い(=おしゃべり)ということになるかと思われる。また、A1では、あえて目的語が明らかにされない表現によって、質問するように誘導されているように感じられ、A4でも、あえて不明確な返答から一つの解釈を導き出すように仕向けられていると捉えられるため、特に、工作中的の私的な電話においては、相手がイラつくことになりかねない。もちろん、このようなストラテジーを肯定的に捉えることも可能であり、例えば、女性の発話において注意をひきつける表現が使用され、多くの質問がなされるのは、はっきりした意見や自信がないからではなく、相互(発話)行動を円滑に行うための努力によるという指摘(Fishman 1983)を考慮に入れれば、A1の目的語省略は、協調的なものと捉えることもできる⁷。また、間接的で遠まわしな表現は、丁寧さを表しているとして理解することも可能であり(Braun/Levinson 1978)、A4は、自らの解釈を押し付けない丁寧さを反映しているとして理解することもできよう。

なお、女性のおしゃべりに関しては、脳梁の形態や言語理解における右脳の働き、あるいは、男女の役割分担によって確立されたことばの分化などで説明する以外に、「女ことば」の特徴⁸によって語彙や発話が長くならざるを得ないと説明することもできそうである。いいさしに関しては、必要な表現が省略されるため文が短くなると考えられるが、相手がことばを引き取れば、全体として会話は長くなるはずである。

3. 翻訳の表現を選択する条件

誰の発話であるかが明示されない場合にも、その発話が女性、あるいは、男性のものであることを示唆する表現形式と会話のストラテジーについてみてきた。そこで、(2)を見ると、独り言とも思われる愚痴をまくし立てるAの発話は、必要な情報を得ようとする相手の意図と競合している点で、男性的だということができよう。しかし、おしゃべりが女性的であるとすれば、ことばの量から(2)のAは女性と判断することもできそうである。また、問題解決につながらない発話という点でも、「女ことば」の特徴を満たしているといえよう。

さて、(2)は『ベビーシッター』の冒頭であるが、その後も発話が提示されるだけで、場面が変わるまで地の文が一切ない。そして、当該の発話者たちはしばらく登場せず、かなり内容を読み進めなければ、誰の発話であるか不明である⁹。しかし、(もちろん、翻訳者は最後まで内容を読んでから訳しているであろうが)発話者が誰であるか不明であっても、少なくともAが男性であるということに関しては、オリジナルの発話で乱発されている“fucking”(Frye 1993: 1)ということばから推測可能と考えられる¹⁰。また、(1)に関しては、先行する登場人物が二人の女性であるため、文脈上、話し手の性別は定まるであろうが、さらに、Aの“Would you ever be willing to teach me?”, “No, of course not. But I'd have thought —”や、Bの“I'd be glad to one day, ...”(Frye 1993: 10)といった仮定法を用いた丁寧な表現は、発話者が女性であることを示唆している。(3)に関しては、主人公の一人であるジョー

⁷ (1)に対応するオリジナルの部分では“her”という代名詞が目的語となっており、少なくとも見つかったのが女性であることは明らかだが、個人として同定できなければ聞き手は質問せざるを得ないであろう。

⁸ 付加疑問を含めた間接的・婉曲的な表現以外に、「女ことば」の特徴としては、感嘆詞・倒置・前置き・相づち・確認・援助的質問・付け加え・沈黙修復・発話の促し・敬語・擬態語・強調・美化法等が指摘されている。なお、B1を割り込みだと判断すればA1, A2は倒置ともいえよう。

⁹ このような宙ぶらりの状態は、サスペンスにおいて必要不可欠な要素であるといえる。

¹⁰ (2)のAに関しては、オリジナルの“I had to get the hell out of there”や“I'm sweating like a pig”(Frye 1993: 1)といったことばも男性であると示唆するであろう。

ジアが一人称であらわされる部分であり、さらに、ラリー (=ローレンス) に電話したという文脈が先行しているため、男女の会話であることは明らかであろうが、“Guess what, darling?” (Frye 1993: 7) のような表現は、女性が使用しがちだと指摘されている¹¹。オリジナルの作者がこのような表現を用いたのは、発話が男女いずれのものであるかを示すためであるとも考えられる。

以上で見てきたようなオリジナルの表現の特徴と文脈から、それぞれの発話が女性、または男性のものと判断され、翻訳ではその判断に依存して表現が使い分けられていると考えられる。そして、『ベビーシッター』において、その判断に誤りはなさそうである。しかし、“Oh dear” に関して、弱者側の消極的な語彙とされているから男は使用しないと行った男性が、約十分後に “I can't come up with anything. Oh dear, I'm just going to run the tape down.” と行った (Edelsky 1977: 237)¹²、あるいは、ある女性が “Damm it, I can't get this thing pluggd in.” といったのを聞いていた年長の子供達が、「女は “Damm it!” ということがありますか」と言う質問に、否定的に答えた等の指摘がある (Edelsky 1977: 242)。これらの表現形式に関する直感的な判断は、現実の言語使用における性差というよりは、ステレオタイプとしてのイメージの性差に依存している。“fucking” に関して、男だけが使用する表現とはいえ、“Guess what” といった表現や、仮定法の使用も、女性には限定されないであろう。特に、排他的な「女ことば」・「男ことば」は少ないと考えられる英語では、発話者にいずれの性を付与するかは、文脈を慎重に見て判断する必要があるといえよう。

翻訳で発話者の性を明らかにしていると考えられる日本語の終助詞に関して、性差と使用語彙との関連付けが成立しなくなっている (現代日本語研究会 1999, 高崎 2002)¹³。実際、著者などは、下がるイントネーションのワを日常的に使用しており、そのため、イントネーションの付与を誤れば、女性の発話を男性の発話と理解する可能性も否定できない。また、女性・男性に関わらず、ダゾ、ノサ、カシラ、ダコトといった文末の表現は (冗談めかした話し方を除いて) ほとんど耳にしたことがない¹⁴。つまり、現在の日本語においては、女性・男性が占有的に使用する表現が少なくなっていると考えられる。そして、『ベビーシッター』のこれまで引用してきた箇所でも、コト、カシラ、ダゾ、ノサといった表現を使用することなく、中立的な表現を使用することもできたはずである。それにもかかわらず、敢えて性別を明示するような表現が使用されているのは、登場人物の性別だけではなく、キャラクターが関わっていると考えられる。(1) においては何億ドルにもなりそうな会社の買収計画を影で進める人物達が会話しており、(2) では、男に振られて落ち込んでしまい、大学をやめて引きこもっていたが、人のためになることをして立ち直ろうと (いう振りを) しているベビーシッターに応募してきた女性と、出版社に勤めていた頃の自分の年収を一週間で稼ぎ出す男性を夫として、ほとんどの家にプールがありそうな郊外の閑静な住宅街に住む女性が話している。(3) では、その女性と、ウォール街で大金を動かすバリバリのディーラーである夫が電話している。これらの例では、

¹¹ (1)のA1で「すばらしい」という訳が与えられている“marvelous” (Frye 1993: 10), (3)のB2で「そう」と訳されている“Great” (Frye 1993: 7) もそれぞれ女性・男性に特徴的とみなされるかもしれない。

¹² ちなみに、(2)のAの「まいったよ」のオリジナルは、“Oh dear”でなく“Jesus Christ”(Frye 1993: 1)であった。

¹³ 文法形式に関して、「倒置」は(言い残さないため)男がより多く、ストラテジーとしての前置きは(主導権を握ろうとする)男に多い場合もあり、問題解決的か否かは、当該の発話者の知識や意図と内容に依存すると指摘されている(内田1997)。おしゃべりということに関して、学校の授業、議論において、男の方がよく話すという調査は否定されていないようである。さらに、感情的ということに関して、結婚観について学生のエッセイを集め、クラスに提示して書き手の性を予想してもらった際に、あるエッセイでは、男性が書き手であったにもかかわらず、圧倒的多数が「ロマンチックなので女性」と回答したともいわれている(熊谷2002)。

¹⁴ 著者の居住地、年齢、職業、性格などが影響して、たまたまそのようなことばを使用する人物と関わっていないだけかもしれないことをお断りしておく。なお、ここで「冗談めかした」と形容した話し方は、因 2002で、他人格・別人格モードの発話として議論されている。

オリジナルで使用されている表現はもちろんのこと、さらに、それぞれの発話者のキャラクターを考慮に入れ、当該の人物の発話で使用されそうな表現が選択されていると考えられる。大雑把に言えば、汚いビジネスを進める権力と財力を持つ人物や、株で稼ぎまくっているエリートが誇示しそうな「男らしさ」、あるいは、掃除婦¹⁵に加えて時給十ドルでベビーシッター雇うことに決める「典型的な専業主ママ」(『ベビーシッター』91)や、そこでベビーシッターを勤めようとする女性に期待されそうな「女らしさ」が表現に反映しているといえよう。ダゾ、ノサやダコト、カシラに関して、それを使う実在する人物の顔が思い浮かべられない著者にも、ダゾやノサを使用する強気な男性のイメージ、ダコトやカシラを使用するお上品な(つमりの)女性のイメージはあり、『ベビーシッター』の登場人物は、ことばを発する人物のイメージに対応するキャラクターを持っていると思われる。

翻訳者が翻訳に使用する語彙の選択において考慮に入れる要件は、発話者である登場人物の恒常的なキャラクターにとどまらなると考えられる。一人の人物が使用することばは一つのパタンに限定されているわけではなく、相手次第で変わるからである。例えば、エリートのラリーも、上司を相手にすれば、妻を相手にする時とは異なる表現を用いる。

(4) もう一つの電話がなった。私用電話だ。八時十五分。

A1:「ラリー・コーフィですが」僕は右手で受話器を取って機械的に応じた。「しばらくお待ち」

B1:「ラリー、明朝九時半、三十九階会議室。来られないような事情はなかるうな」御大直々の呼び出し。(私用電話でか?)

A2:「ええ、何があったんです?何か持参するものでも?もしもし、レオン?」すでに電話は切れていた。(『ベビーシッター』54)

Aが男性であることはA1の名のりや一人称の「僕」からも明らかである。また、B1の、必要な情報のみを列挙し、「なかるうな」ということばで終わる発話や、その後、一方的に電話を切ってしまうあたりからBも男性と理解されよう。しかし、A1の「ラリー・コーフィ」という部分に、女性の名前が入っていてもさほど違和感はないであろう。実際、B1のラリーのことばは、ラリーと話をするレオンの秘書(女性)のことばと大差はないといえよう。

(5) A1:「不在ですよ」御大の秘書アナベル・モーガンが・・・

B1:「承知の上さ。たった今電話で話したところだ」・・・「ところで、どうなっているんだ?何の話なんだ?」

A2:「何の話って何がです?」

モーガン女史¹⁶はまったくご立派な御仁で、それなりに言葉づかいもよく・・・

B2:「明日の朝、話があるそうだ。九時半に。きみが知らないはずがないだろう?」

A3:「とにかく知りません。言われたのは予定を全部キャンセルするように、ということだけですから」(『ベビーシッター』56-57¹⁷)

¹⁵ PCを考えれば、「掃除師」とでもいうのかと思うが、『ベビーシッター』にある表現に従った。

¹⁶ 最近目にする事の少なくなった「女史」も女性冠詞の一つといえる。

¹⁷ オリジナルでは、ローレンス(A)の発話内にPCとして不適切とされるであろう“horny”(Frye 1993: 32)ということばがあるが、さらに、女性であるアナベル(B)が男性であるローレンスに対して“sugar”(Frye 1993: 33)ということばで切り替えしているのは興味深い。

また、ベビーシッターのハリエットは、雇い主となるジョージアと(1)に見られるようなことばで会話しているが、子供と話している時には使用することばが異なる。以下で引用するレベッカ(=ハリエット)がダニー(=ジャスティン)に向かって話すところでは、「私」が使用されているため、女性であるという印象が強いであろうが、子供相手ということを考慮に入れば男性の発話でもおかしくないであろう。

- (6) 「・・・夢の中でウォーロックたちが私たちを捕まえに来てね、ほんとに木の間に一人見えたような気がするんだよ。とっても恐ろしい顔だった。そこで考えたんだ。どうして私たちを捕まえに来たんだろう、冬なんだから、眠っているはずじゃないか、ってね。でも、とにかくこいつは眠ってなかったんだよ」(『ベビーシッター』173)

翻訳者は、人間関係を見極めた上で、表現を選択していることが理解されよう¹⁸。

4. おわりに

翻訳者はオリジナルを読みこんで、発話者が女性・男性のいずれであるかを判断し、さらに、その人物のキャラクター、および、当該のキャラクターを持つもの同士の関係をふまえた上で、言語表現を選択している。選択されるのは、当該のキャラクターや当該の人間関係が日本で成立していた場合に、その人物が使用しそうな表現ということになるだろう。ところが、第3章で見た現状の言語使用を考慮に入れば、『ベビーシッター』で使用されることばを日常生活で使用すると不自然に感じられるはずである。『ベビーシッター』の日本語が古いとは思われず、また、登場人物に風変わりなキャラクターを付与することなく自然に読める著者は、古いことばとキャラクターのイメージを持っていることを認める必要があるかもしれない。なお、『ベビーシッター』の発話表現が不自然に感じられない理由としては、小説であり、しかも翻訳であるということもあげられるだろうが、文学作品やテレビドラマにおいては、日常の会話に持ち込めば古いという印象を受ける発話表現が多いと思われる。これは、作家の持つ、あるいは、作家が読者が持つと想定している、抽象的な女性・男性、キャラクターや人間関係のイメージに対応する言語表現が古いかからだと考えられる。その点で、翻訳を含めた文学は、ジェンダー・イデオロギーを保守する機能を持っているといえよう¹⁹。本論は、小説内の発話表現に関するケーススタディーに過ぎないが、架空の人物のキャラクターと言語表現を検討することで、作者や読者が普段意識していない、人物の性格や感情と言語表現の対応付けが部分的に論証できるかもしれない。

¹⁸ ジョージアに関しては、夫より地位の高い人物と話をする時にも「ごめんなさい、何か聞き逃したのかしら?」「えっ?誰ですって?」(『ベビーシッター』32)などのことばを使っており、警部補と話す場合でも、「ジャスティンは死んでいると思う?」(『ベビーシッター』208)、「でも、なぜ?あの子が死んでいるという根拠があるの?」(『ベビーシッター』209)など口調に変化がみられないが、それもまた、ジョージアの(例えば世間知らずなどの)キャラクター作りに一役買っていると考えられる。

¹⁹ もちろん、最近のドラマではそうでないものもあるようだが(高崎 1996, 遠藤 2000)、文学のことばが「美しい」と仮定するならば、ことばの変化は常に醜いものへの変更であり、乱れと称されるのも自然なことという帰結が導き出されるだろう。

引用文献

アレクサンドラ・フライ 竹生淑子 (訳) 1995 『ベビーシッター』 扶桑社
 Frye, Alexandra 1993 *A Perfect Wife And Mother*. New York: Viking Penguin

参考文献

- Edelsky, Carole 1977 "Acquisition of an aspect of communicative competence: Learning what it means to talk like a lady." Ervin-Tripp, S. et. al. (eds.) *Child Discourse*. New York: Academic Press. 225-243
- Brown, Penelope / Levinson, Stephen C. 1987 *Politeness*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Fishman, Pamela M. 1983 "Interaction; the work women do." Thorne, B. et. al. (eds.) *Language, gender and society*. Rowley, Mass.: Newbury House. 89-101
- Frank, Francine / Anshen, Frank 1983 *Language and the sexes*. New York: State Univ. of New York Press (吉村秀幸 他 (訳) 1995 『英語にみる性とことば』 関西大学出版部)
- Lakoff, Robin 1975 *Language and woman's place*. New York: Harper & Row. (かつえ・あきば・れいのるず (訳) 1985 『言語と性』 有信堂)
- Pease, Allan / Pease, Barbara 2001 *Why men don't listen and women can't read maps*. London: Orion (藤井留美 (訳) 2002 『話を聞かない男, 地図が読めない女』 主婦の友)
- Smith, Philip M. 1985 *Language, the sexes and society*. Malden Mass.: Blackwell (井上和子 他 (訳) 1987 『言語・性・社会』 大修館)
- Tanne, Deborah 1990 *You just don't understand*. New York: William Morrow (田丸美寿々 (訳) 2003 『わかりあえる理由 わかりあえない理由』 講談社)
- 新井康充 1999 『脳の性差: 男と女の心を探る』 共立出版
- 井出祥子 (編) 1997 『女性語の世界』 明治書院
- 内田伸子 1997 「会話行動に見られる性差」 井出 (編) 74-93
- 遠藤織枝 2000 「人気ドラマの話し言葉に見る性差」 『ことば』 21, 13-23
 —— 2001 『女とことば』 明石書店
- 熊谷滋子 2002 「新聞投書を利用したジェンダー意識調査」 『言語』 31/2, 38-39
- 現代日本語研究会 (編) 1999 『女性のことば・職場編』 ひつじ書房
- 中村桃子 2001 『ことばとジェンダー』 勁草書房
- 高崎みどり 1996 「テレビと日本語」 『日本語学』 15/9, 46-56
 —— 2002 「『女ことば』を創りかえる女性の多様な言語行動」 『言語』 31/2, 40-47
- 因 京子 2002 「マンガに見るジェンダー表現の機能」 『日本語とジェンダー 3』
 (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/>)
- 伏見憲明 1997 『〈性〉のミステリー』 講談社
- 堀井令以知 1990 『女の言葉』 明治書院